

# 明代の地理家王士性について

薄井俊二 埼玉大学教育学部言語文化講座

キーワード：王士性、五岳遊草、広志繹、中国地理書、地の科学

## 1. はじめに

中国文明は、外からの影響を受けつつも、独自の科学思想・科学技術を発達させてきた。英国のJ・ニーダム<sup>(1)</sup>を嚆矢とする研究により、それらの内容や価値が明らかにされつつあるが、大地のありよう、及びそこにおける人間のありようをどう捉え理解するかという「地の科学思想」については、治水水利史<sup>(2)</sup>や、歴史地理分野<sup>(3)</sup>を除けば、研究が進んでいるとは言い難い。

そうした中、明代は、陽明学や禅の思想といった哲学的思弁が深められた一方で、合理主義・実証主義的な知的活動が盛んとなり、科学思想や科学技術に関わる優れた著述が輩出した時代でもあった<sup>(4)</sup>。その中で、近年、王士性(1547～1598)と徐弘祖(1586～1641)という二人の知識人の「地の科学」に関する著述が評価されつつある。徐弘祖については、中国では毎年複数の著述が出版されるなど様々な面が明らかになりつつあるが、王士性については、基礎的な研究についてもまだ緒に着いた段階である。

そこで本稿において、王士性について、伝記や著述に関する基礎的な研究を行い、王士性研究の手始めとしたい。王士性の著述をまとめて刊行した活字刊本は、現時点で次の三点である。本文の異同はほとんどないが、本稿では、③の「王士性集」を用いた。

### ●王士性の著述の刊本

- ①『王士性地理書三種』(上海古籍出版社、1993年):王士性の全著作を収録(「地理書三種」と略)
- ②『五岳遊草・広志繹』(元明史料筆記叢刊<sup>(5)</sup>、中華書局、2006年):「五岳遊草」と「広志繹」の二篇を収録(「中華書局本」と略)
- ③『王士性集』(浙江文叢、浙江古籍出版社、2013年):王士性の全著作を収録(「王士性集」と略)

## 2. 王士性の伝記

王士性の家世と伝記に関する資料としては、王士性自身の著述の他、「明史」巻223王宗沐伝、台州府志と臨海県志といった地方志、臨海博物館所蔵の「稅務街王氏支図」があった<sup>(6)</sup>。しかしその後、「章安王氏宗譜」なる文献が「発見」され(1992年)、そこには王士性を含む、王氏の家世や事績がかなり記録されているという<sup>(7)</sup>。この「章安王氏宗譜」は、日本国内の図書館の所蔵が確認できないため未見であるが、第十六世から第十九世分<sup>(8)</sup>は、『王士性集』に附録として収載されている。それ以前の部分については、先行研究の紹介という形で、使用していく。近人作成の年譜としては、周振鶴と朱汝略のものがある<sup>(9)</sup>。

### 2-1. 家世

始祖は、王燠。紹興(両浙東路紹興府、府治は会稽)の人で、南宋理宗朝(在位1224～64)

に仙居県（同台州）の尉をつとめ、任期中に没した。二世王貴の時に、同臨海県黄沙に移住、七世王伯澄の時に、郡城（即ち臨海県城内）に移住した。

九世新沢（明天順8年〔1464〕卒）に四子があって、第三子王道隱の子孫が王宗沐、第四子王道重の子孫が王士性である。

道隱系の十三世王訓が初めて税務街に住み、その子の十四世が王宗沐である。

王宗沐については、三浦秀一「明朝の提学官王宗沐の思想活動と王門の高弟たち」<sup>(10)</sup>がある。嘉靖2年（1523）生、同23年（1544）に22歳の若さで進士に及第。同29年（1550）に広西提学僉事となったのを皮切りに、広東参議、江西提学副使、山西布政使、南京工部侍郎などを歴任し、万暦9年（1581）、59歳で致仕、万暦19年（1591）卒した。「明史」巻223に立伝。「明史」は山西布政使時代の飢饉に際しての上奏と、隆慶5年（1571）の膠萊河開削か海運かをめぐるとりあげ<sup>(11)</sup>、さらに治安維持のために義勇軍を組織して成果をあげたことを紹介している。この点で「明史」は、王宗沐を循吏的な官僚として描いている。その一方、黄宗羲「明儒学案」では、王宗沐を「浙中王門学案」に置き、彼が欧陽南野などの王学の影響を受けた儒者であったとしている。「章安王氏宗譜」は、この王宗沐が創始したものである。

「明史」はまた王宗沐の息子である王士崧が万暦11年（1583）に、王士琦も同年に、王士昌が万暦14年（1586）に、それぞれ進士に及第したとして、彼らの伝記を述べる。さらに王宗沐の従子として、王士性をあげ、万暦5年（1577）に進士に及第したとして、伝記を述べる。いずれも行政官としての治績が記されている。

王士性が、一世代上の王宗沐とどの程度の交わりがあったかは不明だが、「〔康熙〕臨海県志」王士性伝では「家甚貧」とあり、行政官・政治家として活躍していた時期の王宗沐から、経済的な援助を受けるような関係ではなかったようである。王士性の進士及第は王宗沐の息子達のそれより数年先立つが、挙人となって以後は、同姓同系のものとして、何らかの交わりがあったことは予想される。

道重の系統は、十四世王斯縷（1411～？）、十五世王明（1461～？）と続き、十六世闇（1498～1530）に至って「生員」となったが、惜しくも弘治11年（1498）に早世している。十七世が王士性の父親である王宗果（1522～1600）。彼に二子があり、長男が十八世の王士性である。さらに彼の息子の十九世王立穀は、陳函輝を介して徐霞客とつながりがあつたのではないかと、との指摘もある<sup>(12)</sup>。

## 2-2. 経歴と所在・移動

王士性は、嘉靖26年（1547）3月10日、浙江東南部の台州府臨海県に生まれる。

嘉靖年間、いわゆる「後期倭寇」が盛んな時代で、浙江・福建・南直隸南部は、その被害にさらされていた。明王朝はこの年、本格的な対策に乗り出し、朱紈を浙江巡撫兼五省海道都督として浙江に派遣している<sup>(13)</sup>。以後、およそ20年の間、浙江と福建の地では、倭寇の侵攻と明王朝の派兵が繰り返されることになる。王士性が育つたのはそのような環境の中であつた。

嘉靖41年（1562）ごろには、「書を読むに、目を過ぐれば誦を成す」という英才ぶりで、「性、磊落にして群れず」であつたが、「生産を治めず、家、甚だ貧なり」という状況であつた。しかし隆慶3年（1569）には「首拔異等」という高評価を得、翌4年（1570）に武林（杭州）の天真書院に遊学する。故郷から離れての遊歴はこれが初めてであつた。

万暦元年（1573）に挙人となる。同2年（1574）に、浙江東部の金華・仙都などを遊歴。

同5年(1577)に進士となり、士大夫としての活動がスタートする。31歳。翌6年(1578)、年初に、杭州西湖を經由して北京に上ると、河南汝寧府確山県の知県の任を下された。4月に赴任し、5月に確山県に至る。確山県は漢代には朗陵県といい、王士性はこの折に作った詩文集を「朗陵稿」と名づけている。万曆9年(1581)、確山県令の任期が満ちたが、同年中に再任となる。同年中に、河南省中部を一周する遊歴をする。

同11年(1583)8月、中央に戻り、礼科給事中となる。天下の大計として、「朝廷要務二条、官司要務三条、兵戎要務四条」凡そ数千言を上奏。「多議行」であったという。

同12年(1584)、「朗陵稿」成る。

同13年(1585)、母の林氏が没し、服喪に入る。翌14年(1586)に廬山武夷山の遊。給事中として在京していた時代の詩文を「燕市稿」「掖垣稿」としてまとめる。この年、徐弘祖生。

同16年(1588)、喪が明け<sup>(14)</sup>、北京へ上り、礼科給事中に復職。その前に南京や茅山など呉を遊歴。吏科右給事中に転じる。同年、四川で試験官を務めることになり、成都へ赴任。同17年(1589)、広西参議を任命され、成都を離れる。在四川時代の詩文を「入蜀稿」にまとめる。同18年(1590)、雲南瀾滄兵備副使(滇臬副使)に転じる。同19年(1591)、これまで作成の詩文をまとめなおし、「五岳遊草」として成書。同20年(1592)、任地の疲弊を上申するも、取り上げられず。この年、王宗沐没。同21年(1593)、大理寺少卿に任ぜられ、雲南を離れる。すぐに河南堤学に転じ、さらに山東参政に転じる。山東の荒廃を見て「賑粥十事」を著述。この年、前年に勃発した文祿の役に明軍が参戦。同22年(1594)、山東参政から河南副使へ、さらに吏科給事中・太僕寺少卿へと転じる。同23年(1595)、太僕寺少卿に昇進。都察院右僉都御史として河南巡撫の候補にあがるも辞退。南京鴻臚寺少卿に転じる。同25年(1597)、「広志釋」なる。

同26年(1598)2月、鎮江にて没。享年52歳であった。

河南省の確山県の知事が初めの官で、中央の官職としては、礼科給事中から始まり、南京鴻臚寺少卿が最高位。地方官としては、知県、省試験官、省参議、兵備副使、省参政、省副使を歴任。巡撫は候補に挙がるも辞退している。赴任した省は、河南・四川・広西・雲南・山東を数える。山東という中国の東端と、四川・広西・雲南といった西南部での経験は、王士性の地理的な感覚を養うのに大いに資するものがあっただろう。

### 2-3. 遊歴と著述対象地

まとまった主な遊歴とそれが記されている著述は以下の通り。

○万曆2年：浙江の金華三洞・永嘉・樂清・玉甌・北雁→「五嶽遊草」越遊記・遊雁宕記

○同6年：浙江の杭州西湖→「五岳遊草」呉遊記・遊武林湖山六記

○同9年：河南の嵩山・鄭州・許商を含む河南中部→「五岳遊草」嵩遊記

○同14年：江西の廬山、福建の武夷山、浙江の四明山・雁蕩山→「五岳遊草」越遊記

○同15年：浙江の天台山・杭州、南直隸の太湖・金陵・白岳山→「五岳遊草」呉遊紀行

○同16年：喪が明け、南直隸・山東を經由して北直隸の北京へ。さらに河南・陝西を經由して四川へ。さらに湖広へ。

南直隸の茶城・白雲洞→「五岳遊草」大河南北諸遊・茶城白雲洞記

山東の泰山・孔林→「五岳遊草」岱遊記

山西の恒山→「五岳遊草」恒遊記

直隸の涿州・邯鄲、河南の孟県、陝西の函谷関・長安→「五岳遊草」大河南北諸遊・西征記  
四川の羌州・成都→「五岳遊草」入蜀記  
湖広の太白山→「五岳遊草」楚遊・太白山遊記

○同17年：

江西の廬山→五岳遊草遊廬山記  
湖広の洞庭湖・南岳→五岳遊草衡遊記  
桂林→「五岳遊草」滇粵遊・桂海虞衡志續

○同18年

雲南→「五岳遊草」滇粵遊

### 3. 王士性の著述

#### 3-1. 概要

王士性の地理に関する著述は、「五岳遊草」「広遊志」「広志釋」の三書があり、他に「吏隱堂集」もしくは「王恒叔近稿」と呼ばれる詩文集が残る。これは「掖垣稿」「朗陵稿」「入蜀稿」「尺牘」「燕市稿」の五種類の著述をまとめたものである。しかし、同じ詩文が、別の著述に重複して見られるものがある。また、丁伋<sup>(15)</sup>は、他に「東湖志」があったというが伝わらない。以下、主に周振鶴らの説<sup>(16)</sup>を参照しつつ、紹介していく。

#### 3-2. 「五岳遊草」

##### 3-2-1. 概説

「四庫全書総目提要（以下「四庫提要）」巻78史部34地理類存目7（遊記之属）に収録。

万曆19年（1591）の自序の他、万曆21年（1593）の屠隆<sup>(17)</sup>の序があり、このころの成書と思われる。現在伝わる刊本は、清康熙31年（1692）の重刻本が最も古い。「重刻」とあればそれ以前に刊本が存在したことが分かるが、初刻本は伝わらず、いつ刊行されたかは不明。周振鶴は、王士性の生前に刊行されたというが<sup>(18)</sup>、その証拠はない。あるいは屠隆の序が書かれた万曆21年に版に付されたのか。馮甦による重刻本には、潘耒<sup>(19)</sup>と馮甦<sup>(20)</sup>の序が賦されている。

伝存本は12巻で、「四庫提要」も同じ。しかし末尾2巻の「雑誌」は、実は次に検討する「広遊志」である。「五岳遊草」を刊行する際、「広遊志」を合わせて版に付したものが、次第に紛れ、あたかも「五岳遊草」が12巻であるかのような扱いを受けたもの。ここでは、「雑誌」2巻を除いたものを「五岳遊草」とする。

題名の「五岳遊草」は、五岳の遊記を揃えて巻頭に置いていることからの命名で、遊歴して記述の対象とした場所は、中国全土にわたる。

##### 3-2-2. 内容概観

巻一から巻七の7巻が散文の遊記で、巻八から巻十の3巻が遊覧の詩。巻一の五岳の遊記は「嶽遊上」と題されるが、それに対応する詩は、巻八に収録され、「嶽遊下」と題される。このように、「上」で遊記を記し、「下」でそれに対応する詩を収録するという形式を取っている。

巻二以下の内容をあげれば、巻二が「大河南北諸遊上」で、万曆16年の北京から長安へ至る行程を記した「西征曆」以下、5篇。その中の「西征曆」は、後述する「入蜀稿」からの再録。「遊

梁記」も、後述する「朗陵稿」からの再録である。巻三が「吳遊上」で「吳遊紀行」(9首)、「留都述遊」、「遊武林湖山六記」からなるが、このうち「留都述遊」は、遊記ではなく、留都(即ち南京)の地勢がよく、王都にふさわしいと説く、評論文である。巻四が「越遊上」で4篇。巻五が「蜀遊上」で、4篇からなるが、いずれも「入蜀稿」からの再録。巻六が「楚遊上」で、「太和山遊記」以下4篇だが、最後の「吊襄文」は襄陽の地勢や人物について述べる「地志」である。巻七が「滇粵遊上」で、「桂海志續」以下6篇からなる。

合計で31篇からなるが、6篇が旧著からの再録である。全体としてややまとまりに乏しい感があるのは、一度に書き上げたものではなく、これまで書きためてきた文章を改めて編集したことに起因するのであろう。

遊記の内容は、「嵩遊記」や「遊武林湖山記」のような、短文の山川遊記が多い。これらは、特定の山川を遊歴し、見聞きして感じたことなどを記す、典型的な「山川遊記」である。しかし、「西征曆」のような、数十日にわたる旅行を日記風に記したものも数篇ある。これらは、王士性に遅れて登場する「徐霞客遊記」の先駆けと言えるのではないか。

また「留都述遊」や「吊襄文」のような、遊記ではなく、地理的な事象を考察した論文もある。これらは、のちの「広志釋」につながるものがある。

巻八は「嶽遊下」7篇11首と「大河南北諸遊下」17篇23首からなる。「嶽遊下」には、「入蜀稿」からの再録が3篇7首、後述する「燕市稿」からの再録が1首ある。「大河南北諸遊」には、「入蜀稿」からの再録が8首あり、「朗陵稿」からの再録が13篇ある。巻九は「吳遊下」32篇33首と「越遊下」28篇41首からなる。「越遊下」には、「燕市稿」からの再録が1首ある。巻十は「蜀遊下」16篇16首、「楚遊下」4篇8首、「滇越遊下」19篇21首からなる。合計で123篇153首である。

### 3-3. 「広遊志」

#### 3-3-1. 概説

前述のように、この著述は、現存するものは「五岳遊草」、もしくは「広志釋」の一部として刊行されており、単独の出版物としては存在しない。

著述の時期は不詳だが、次の「広志釋」が「広遊志」に「追釋(追加して述べる)」<sup>(21)</sup>したものと考えられるので、「広志釋」序文執筆の万暦25年(1597)より以前、と考えられる。四川・貴州・雲南の内容を含んでいるので、雲南に赴任した万暦18年(1590)以後かと思われるが、あるいはそれ以前から長年にわたって書いてきたものをまとめたものかもしれない。

地理的なテーマについて論述した論文集であるが、清朝に書かれた「日知録」などの札記を思わせる。「二十二史劄記」が、歴史と歴史書に対する札記であれば、本書は地理に関する札記であると言える。

#### 3-3-2. 内容概観

とりあげられている課題は、上巻が「地脈」「形勝」「風土」「夷習」で、「形勝」と「風土」には、「附龍江客問」と題する篇が附加されている。客からの問いに答えるという形で、それぞれの課題についての王士性の見解が述べられる。下巻は、「勝概」「磯島」「陵墓」「洞壑」「古木」「古蹟」「碑刻」「樓閣」「書院」「刹宇」「蠱毒」「仙仏」「物産」「奇石」「温泉」「声音」である。このうち、「地脈」「形勝」「風土」の3篇は、清顧炎武の「天下郡国利病書」第一冊北直上に収録されている<sup>(22)</sup>。天下の名山大川を列挙する「勝概」や「奇石」のような、いわゆる文人趣味的なものも含まれるが、

今でいう自然地理と人文地理の双方にわたる広汎な課題が提示されている。

何点か内容を紹介する。

「地脈」は、中国の大地を三大龍脈が西から東へと横たわり、そこを「気」が流れていると説く。そして三大龍脈の盛衰による「気」特に「王気」の消長が、王朝の盛衰と関わりがあるという。具体的には「中龍」が最初に「発動」していたとする。伏羲以来、周公や孔子、秦漢唐宋と王朝が続いたのは、「中龍」が盛んであり、「王気」をその地にもたらしたからだという。次に「北龍」が盛んになり、古代では黄帝や堯舜禹が登場、匈奴や突厥などの北方異民族と遼・金の中国北部支配、そして元による中国統治となった。そして南宋以後、「南龍」が盛んとなり、現在の明王朝の隆盛へとつながっているとする。こうした「三大龍脈説」と、龍脈の盛衰と王朝の盛衰との関連性は、明代の風水書である、徐善繼・徐善述「地理人士須知」<sup>(23)</sup>に説くものほとんど重なり、興味深い。徐弘祖も小論「溯江紀源」で同様のことを述べている。彼らは、大地を俯瞰的に捉える際に、風水説の考えをとり入れたものと思われる<sup>(24)</sup>。

「風土」は、各地域の気候や気象を述べたものだが、それらは、その地における「陽気」や「陰気」の多寡によるものとする。これも「地脈」によってもたらされるものであり、陰陽五行思想や易学、風水説と関わる自然観である。この考えに基づいて、各省の地理的事象を考察したのが「広志釋」である。

「夷習」では、西南諸夷、すなわち広西雲南の異民族が考察の対象となっている。書籍からの受け売りではなく、実際に観察しての著述であると思われ、一種のフィールドワークの成果と言え、貴重である。

「功德」では、実際に広西参議として粵西の民に接した経験から、本土に組み込まれることによる、重要性を説き、辺境の地を郡県化していった、秦始皇帝と漢武帝を高く評価する。武帝はともかく、この時代に始皇帝を肯定的に評価するのは、あまり例を見ない。

「蠱毒」は、蠱虫という存在による毒であるが、閩（福建）・広西東・貴州・滇（雲南）といった南部にしか見られないとする。食中毒の一種と見ているようだが、これを操って人に害をなす場合もあるという。「広志釋」の「広西」の部でも取り上げている。

「物産」では、各地で産出する特産品を論ずるが、ここでもどういう「気」がそこに集まっているか、という観点で判断している。

「声音」では、簡略ながら方言を論じている。

全体的に簡略な記述に留まっているが、「風土」「夷習」などのテーマ（課題）の設定そのものも、そこで展開される議論も、十分に客観的な地理的研究として評価できるものである。その一方、伝統的な中国思想である、陰陽五行説や易学、風水説などの流れの上にある。王士性の地理思想の科学性を評価する場合には、このことをきちんと踏まえる必要がある。

### 3-4. 「広志釋」

#### 3-4-1. 概説

「四庫提要」巻78史部34地理類存目7（遊記之属）に収録されているが、内容は遊記というよりは「地理的課題に関する小論文集」である<sup>(25)</sup>。「四庫提要」は、「雑誌」なる文章を含むように記すが、既述のように、この「雑誌」は前出の「広遊志」である。

万曆25年（1597）仲秋の自序、並びに同年初冬の馮夢禎<sup>(26)</sup>の序がある。その翌年の年初に王士性は没しており、この書が成ったのは、その直前になる。

もちろん、生前には刊行されておらず、現存する最古の刊本は、楊体元<sup>(27)</sup>により、康熙15年(1676)に刊行されたもの。楊体元と曹溶<sup>(28)</sup>の序文がある。これには、前述の「広遊志」が、「雑志」の題で収録されている。また嘉靖22年(1817)に、宋世榮<sup>(29)</sup>によって、台州叢書の一部として刊行されたものがある。こちらは「雑志」は「五岳遊草」の十一巻と十二巻にあたるとして、割愛している。

「広志釋」は、中国地理総論にあたる巻之一「方輿崖略」、各地域論にあたる巻之二「兩都」、巻之三「江北四省」、巻之四「江南諸省」、巻之五「西南諸省」からなる。巻之六「四夷輯」は、題名に「考訂嗣出」と注が附されているだけで、本文は存在しない。もともと無かったのか、出版に当たって割愛されたのか、定かではない<sup>(30)</sup>。

地理的な事象をテーマにして、それがどういうもので、どういう形を取り、またどういう要因で形成されるのか、といったことを考察する。「広遊志」の三つの論が、「天下郡国利病書」に引用されていたが、顧炎武のもうひとつの地理書「肇域志」にも、随所で「広志釋」の引用がみられ、大きな影響を与えたことが分かる。ただし、王士性の地理的考察のバックにある思想は、「広遊志」以来変わらぬ、陰陽五行思想や易学、風水説の原理である。

本書は、王士性の人文地理学家としての地位を確立したものだとの評もあるが<sup>(31)</sup>、自然地理的な視点からの論述も少なくない。その中には、治水水利論のような、現実を踏まえての客観的科学的なものもあるが、龍脈説など堪輿家言に基づくものもある。とはいえ、堪輿家と我が身との間に一線を画するときもある。

## 3-4-2. 内容概観

### 3-4-2-1. 「方輿崖略」

巻之一「方輿崖略」は、中国全体に関わることや、各地域に跨る事柄を取り上げる。20篇からなる。

第一節は、唐の僧侶一行の「両戒説」を紹介し、南北の山脈が雲南の太華山で会するとする。山脈を大きな流れるものとして捉える、風水説に近い。第二節は、歴代中国王朝の疆域の変遷を述べ、漢代よりして唐代が最大のピークとなり、さらに元に至って「漠沙」も兼ねていたとする。この二篇は、中国の空間と時間を論じており、全体の序論的なものと言えるが、自然地理的な課題である。第三節は江南の開発史。第四節は賦税が、第五節は特産物が地域によって異なることを述べる。この二節も中国全土を俯瞰してのものだが、人文地理的な内容と言える。

自然地理的な課題としては、黄河と長江という二大河川の比較を、土質の違いや注ぎ込む支流の多寡などから論ずる第十一節、潮の満ち引きを論ずる第十三節などがある。

第九節は、南北による人材輩出の違いを述べるが、人文地理的な課題と言える。このテーマは各論の中でも繰り返し出てくるが、違いの要因として、龍脈の盛衰が想定されている。第十節は、種々の物資の集積地となる都市を考察しており、経済地理と言える。天下の府庫の備蓄を論じる第八節、万里の長城とそれをめぐる地理を論じる第十五節、辺境の地の軍備配備を論ずる第十七節は、軍事地理的観点も見られる。こうした人文地理的な視点は、彼が儒教士大夫であり、経世済民の志を持って地理的事象を眺め、考察していたことを伺わせる。在野の人であった徐弘祖が持ち得ないものである<sup>(32)</sup>。

第十六節は、伝統的な天地関係論である「分野説」を批判し、周代の国号を「宿」にあてるのはナンセンスだとする。

最後の第二十節では、五岳と五岳真形図について論じる。ここでは、文献によりながら、中国全土をカバーする視点を展開しており、「方輿崖略」の結びの文となっている。

### 3-4-2-2. 「両都」

卷之二「両都」は、北京及び北直隸に関する「北都」が26篇、南京及び南直隸に関する「南京」が34篇。

「北都」は、燕都は「興王」の地であるとする第一節から始まる。邵子明という人物が「堪輿」の説に基づいて説明しているが、十分ではない、として、自らこの地が王家にふさわしい地勢にあることを論ずる。第二節でも北都に「気」を運ぶ太行山を述べる。

第三節から第六節は、北京の都や都城、宮殿を論じる。地脈については、第十二節で、北京は「大気脈」が通るとする。自然地理的な課題としては、九河の説を考察した第二十二節や北直隸の河川を概説した第二十四節がある。人文地理的な課題を扱ったものは、北京の住民の性格性質を述べる第十五節、第十七節、第十八節や、北京のお祭りや年中行事を紹介する第十六節があり、土質・湿度と生産物の関係を論じた第二十節は、自然人文両方に関わるものと言えよう。

「南京」は、風水説的な傾向が「北都」よりも強く出ている。第一節は「南京の歴史と変遷」だが、続く第二節で、南京の景勝を「堪輿（風水説）」の考えで分析し、地脈をたどっている。初代皇帝洪武帝の出身地とされる鳳陽を述べる第十二節においても、堪輿家言を取り上げ、黄河の水位の変遷を説く第十三節でも、中龍の消長と関連づける。しかし淮水流域の治水を論じる第十六節では、人々が「堪輿家の言」に惑わされて、適切な対応をしなかったことを批判している。同じく治水水利策を検討する、第十四節、第十五節、第十七節、第二十節、第二十六節でも、築堤や疏水といった現実的な策が述べられている。治水水利については、風水説に基づく「河道論」とは距離を置いているようである。また第二十三節では、茅山が峨眉山から来る龍脈の首尾であることは肯定しているが、洞天説には触れていない。太湖を論ずる第二十四節では、洞庭山下の洞穴が九疑山や衡山に通じていることは否定していないようであるが、五道に通じているという「五湖」の諸説をあげ、「臆度」であると批判する。江南の人々の性格性質を論ずる第十八節、第二十一節、第三十節、第三十二節、第三十四節などは人文地理的な分野である。水脈や水質、それと関連する風土病、またお茶など、「水」に関する関心が高い文章が多く見られる（第七節、第二十二節、第三十一節）。

### 3-4-2-3. 「江北四省」

卷之三「江北四省」は、「河南」31篇・「陝西」22篇・「山東」20篇・「山西」14篇。

河南省は、王士性が河南提学・河南副使として赴任した地である。「河南」第一節で河川の概略、第二節で山脈の概略を述べる。第十三節では、洛陽は周公が「卜」して都としたところで、当時堪輿家はまだいなかったが、周公は同じ事をした。いま洛陽の地勢を見ると、とても良い、とする。第十節では、中原は習俗が温厚だとし、第十一節では、開封府は繁華で、人々はこすっからいという、習俗の観察分析を行う。第十五節では、穴居（窑洞）を報告する。第二十八節では自らが赴任していたときの、飢饉や流賊について記している。

「陝西」では、第一節で地勢・水脈と住民の気質との関連を説く。第二節では終南山を通る「脈」について詳述。第六節では、始皇帝陵の立地を堪輿家の説で評価し、「二代くらいしかもたないものだった」とする。ここでは堪輿家言を全面的に承認している。第十八節では、寧夏における、

モンゴル出身の将軍ボバイの反乱を述べ、最後の第二十二節では、アルタンの侵入の顛末を述べ、オルドスは不毛の地なので放棄すべきという。王士性の、治安や外敵の侵入、辺地に関する関心は高い。第十三節では「蠱術」について述べている。

山東省は、王士性が山東参政として赴任した地である。「山東」第一節、第六節、第八節で河川について述べ、洪水や治水についても、第十節、第十一節で述べる。第十八節と第十九節で論じられている、山東から都への糧秣運搬方法については、族叔父の王宗沐の建議が「明史」本伝に収録されている。第二十節では倭寇対策が述べられる。

「山西」では、第一節で住民の気質を述べる。第二節では、標高が高いことと乾燥した気候であることの関連性を説く。続けて窖洞を紹介し、江南の洞は天成だが、塞北の洞は人造だとする。北虜との接点であることに関わる説は、第九節、第十節、第十二節、馬市について第十一節と第十三節で述べられている。

#### 3-4-2-4. 「江南諸省」

卷之四「江南諸省」は、「浙江」39篇、「江西」24篇、「湖広」26篇、「広東」19篇からなる。

序文で、江南の開発は漢の武帝に始まる。広西における秦始皇帝と漢武帝の功績は詠嘆すべきものがあるとし、そのことは「広遊志」にも記したという（「広遊志」功德篇）。

浙江省は王士性の故郷でもあり、最も多くの論がなされている。「浙江」第一節と第三節で、浙江省内部で地域によって気質が異なることを述べる。第四節で、台州が最も要害の地であるといい、第三十六節から末尾の第三十九節の4篇で、倭寇のことを述べる。政治家である王士性が外寇の事を述べるのは当然であるが、倭寇のことは彼自身にとっても生々しい関心事であった。第二十二節では補陀洛山について、第二十六節では洞穴について、第二十九節では雁蕩山について論ずる。杭州が繁華であることは、第二節、第七節で説かれるが、第十節ではそれが天運地脈の回転と関わるものであるという。焼き物の第十一節、養蚕の第十三節と第十四節、出稼ぎ人の第十六節、紹興の「不務正業的遊民」の第二十一節、漁業の第三十四節、製塩業の第三十五節など、産業に関する記事も多い。

「江西」では、第一節で省内の大河川と鄱陽湖を述べる。第二節では、省内にある五つの洞天福地を述べるが、名山としての紹介であり、洞穴としての扱いはない。第三節では、講学が盛んであるとし、今は陽明学が主流であるという。第十四節では、白鹿洞書院を取り上げる。第十八節では、大庾嶺が南龍の幹であるとするが、龍脈のことを追究するのではなく、この地が江西と広東との分水嶺で、物資が集まる経済上の要衝であるとする。第九節で道教の鉄柱宮の伝説を述べるほか、幾篇かで伝説を紹介している。

「湖広」では、第一節で、湖広という「省だて」は確かに昔の「楚」を引き継ぐものだが、広すぎて不便であるとする。第二節で湘江の水系と湘君伝説を、第三節で「禹貢」の「九江」と洞庭湖を論じる。洞庭湖については第七節で、自然科学的な分析を行っているが、第八節では「湖族」とそれらへの兵備について述べる。第二十節では、洞穴を述べるが、地脈との関連は説かない<sup>(33)</sup>。第十六節では、九疑山を龍大幹龍が通るところとし、やや詳しく述べる。第十九節では、気候と土質との関連性を述べる。この地は低くはないが湿だとし、土質が粘土質であるので湿気が凝集しやすいのではという。第十節では、明の大臣を務める人材が、かつては「荊州（湖広）人」が多く、のち「呉人（南直）人」に移り、今は「豫章（南昌・江西）人」が多数だとする。その要因を気運地脈の移動に求めている。

「広東」では、第一節で、この地が漢代の南越であるとし、ここに入る四つのルートを述べる。第二節では、ここは五嶺の外なので「嶺外」とされ、南龍大幹が「空欠の場所」を「横過」する場所であるという。第三節では、広東には珍奇な産物が多く、西洋諸国から舶来したものもあるという。第七節では、香港と外国人居住地について述べる。第九節で、潮州は行政区としては広東に属するが、形勝風俗では福建に属すべきといい、方言においても同様だとする。発音方言への関心は、「広遊志」音声に見られたところである。

### 3-4-2-5. 「西南諸省」

卷之五「西南諸省」は、「四川」21篇、「広西」28篇、「雲南」25篇、「貴州」13篇からなる。序文で、四川と広西が中国化したのは秦漢時代だが、雲南と貴州が郡県化したのは明代からだとし、いずれも「夷漢錯居之地」であるという。

四川省は、王士性が試験官を務めたところである。「四川」では、第一節で、蜀の河川のあらましを述べる。第九節では、重慶と成都の「脈」から、過去のこの地の支配者を論じ、いずれも「覇業の資」「王業の資」にはあたらない場所であるという。地脈と君主の力との関連性を、土地のありようから考えている。

広西省は、王士性が参議として赴任した地である。「広西」では、第一節で広西省の水系を概説し、第二節で山系を概説する。山系も水系同様「脈」であると捉えており、南龍がここを通っているとする。第三節では桂林のカルスト岩山及び鍾乳洞の形勝を絶賛し、漓江下りでは、瀛海蓬萊といった神山もここには劣るだろうという。第十八節では漓江沿岸の交通を述べ、第十九節では、陸上交通の幹線ルートを述べる。

第十六節では、堪輿の視点から、広西省の山川を論じる。少し長くなるが概要を述べれば次の通り。広西桂林の山川の奇は、鑑賞の立場からすれば、海上の三神山よりもすばらしい。しかし、堪輿の立場からすれば、問題がある。一つめは、独立峯が並んでおり、「氣」の「脈」が形成されていないこと。二つめは、岩山の形が、兵器など軍事的なものに似ており、戦争を象徴するものであり「王道」にはふさわしくないこと。三つめは、「氣」が流れるが、止まる場所がなく、素通りしていること。こことは異なり、江南は、都市部が海沿いにあり、人口も稠密で、気脈が凝縮する場所がある。池沼が多く、水の「氣」もさっさと流れてしまわずに、ある程度滞留する。四川省は、山脈・水脈とも、源から発した直後である。成都平原が広がり、水の「氣」が溜まる池沼はないが、出口が三峡一箇所と狭いため、四川省全体に、水の「氣」を行き渡らせることができる。だから、四川省は「西南の大省」たりえた（「蜀」の独立性・自立性と豊かさをいう）。それに対し、広西省と貴州は、開けた洋も水を堰き止めることもなく、水は流れるが素通りしてしまう。都市も気の通過地点になってしまう。総じて言えば、南龍が通過する場所ではあるが、龍王が車を止める場所ではない。だから、江南の諸省と同じ頃に中国に編入されたにも関わらず、未だに栄えることはないのであると結論づけている。第十七節では、前節で述べた広西の「氣」がもたらす「風土病」について述べる。

第四節から第八節では、広西省と雲南省にある、土地の異民族を頭とする「土司」を取り上げる。第四節では、土司達が縄張り争いを繰り返す、まるで春秋戦国時代のような、とし、始皇帝が広西まで郡県制を敷いた施策を高く評価する。第五節では、雲南の土司は、中央派遣の役人に従うが、広西の土司は文書の往来のみで、直接拝謁することすらしない、と嘆いている。土夷については、他に第二十三節で、省内では民夷雑居するも、それぞれの村を作るが、柳州・慶遠・思恩の三府

のみは、夷が中心で、民は城市周辺にのみ居住しているとする。第二十四節では、柳州府懷遠県と慶遠府荔波県は、住民すべてが土夷で、明の役人が入れないという。第二十五・二十六・二十七節でも徭僮のことを取り上げている。

そして末尾の第二十八節では蠱毒を取り上げ、処方箋も紹介している。

雲南省は、王士性が、雲南瀾滄兵備副使という武官として赴任したところである。「雲南」では、第一節で、雲南の夏が他と比べて短いことを計測から明らかにする。第四節では、長江の源流のひとつである金沙江を取り上げる。滇池からの河川の幅を広げ、雲南の物資を江南まで下す計画があり、聞いたときはよいと思ったが、途中の道のりなどを調べてみると、実現の可能性が低いことが分かったとする。「経世済民」の視点から河川を考えている<sup>(34)</sup>。第六節では、役所を建てる際に土地を選んだことを述べる。第七節では、「大理」が温暖で豊かな「楽土」であり、かつ「佳」なる山川がある、理想的な場所だとする。ただしここでは「堪輿」的視点は乏しい。第十節では、この地は天地窮まるころなのに、人は「紅顔白暫」。山川の清麗の気を受けているからだろうとする。土司や夷が幾節かで取り上げられているが（第五節、第八節、第十六節、第二十節、第二十一節、第二十五節）、隣接するビルマやタイの記事もある（第十一節、第十三節、第十四節）。任務に関わるからだろうか、治安維持についての記録もある（第九節、第十二節）。

### 3-5. 「吏隱堂集（王恒叔近稿）」

#### 3-5-1. 概説

本書は、王士性の詩文集であるが、生前に自らまとめたものではなく、五種類の独立した文集と尺牘をひとつにまとめたものである。その成書の経緯はかなり複雑である。

周振鶴<sup>(35)</sup>によれば、南京図書館が所蔵する万曆刊本に、王士性の著述として、「掖垣稿」2巻、「朗陵稿」2巻、「入蜀稿」3巻、尺牘3巻、「燕市稿」2巻がある。全12巻。いずれも板心に「吏隱堂」の文字があることから、「吏隱堂集」という名前でもまとめられていたのだろうという。「光緒台州府志」の「王士性に吏隱堂集12巻がある」という記事が裏付けとなる。「王恒叔近稿」の名は、「掖垣稿」の前に、王世貞「王恒叔近稿序」があることに基づく<sup>(36)</sup>。しかし朱汝略<sup>(37)</sup>は、王世貞の序は「燕市稿」「掖垣稿」の二書をまとめたものにつけられたものであり、既に成書されていた「朗陵稿」に対して「近稿」と題しているのではないかと推測している。

他に王士性の詩文集として「玉峴集」の名が伝わる。「光緒台州府志」に「玉峴集」6巻といい、汪道昆の序文があり<sup>(38)</sup>、その中で、先に「朗陵集」と「燕市集」とがあり、それらをまとめて「玉峴」と名付けたという。そこから周振鶴は、「朗陵集」と「燕市稿」とは、「朗陵稿」と「燕市稿」であろうとする。

そうであれば、王世貞序の「王恒叔近稿」とは「玉峴集」のことであり、王世貞が序文を書いたのも、汪道昆と同じ時ということになる。

そこで「地理書三種」では、本書の題名を「王恒叔近稿」とするが、「王士性集」では、「吏隱堂集」の名を採用している。

以上のことを、「2-2. 経歴」の記事も補いながら、年代を追って記すと下記の通りとなる<sup>(39)</sup>。

- ・万曆12 (1584)、それまでに作った詩文を「朗陵稿」としてまとめる。劉黄、張九一序。
- ・同14 (1586)、給事中として在京していた時代の詩文を「掖垣稿」「燕市稿」としてまとめる。

(この二書が「玉峴集」としてまとめられていた可能性がある。汪道昆序。王世貞序?)

- ・同17 (1589)、それまでに作った詩文を「入蜀稿」としてまとめる。張鳴鳳序。
- ・同18 (1590) まで<sup>(40)</sup>、「王恒叔近稿」王世貞序なる。
- ・同21 (1593)、「五岳遊草」屠隆序。
- ・同25 (1597)、「広志釋」李馮夢序。
- ・同26 (1598)、王士性没。
  
- ・同?、「吏隱堂集 (王恒叔近稿)」刊行。

### 3-5-2. 内容概観

#### 3-5-2-1. 掖垣稿

王士性が給事中であったときに提出した、上奏文である。巻上が5篇、巻下が4篇だが、巻下の2篇は名前が伝わるのみで、本文は欠落している。

本篇所収の上奏文の中には、その内容をまとめたものが「広志釋」に収録されているものもある<sup>(41)</sup>。

#### 3-5-2-2. 朗陵稿

確山県知から給事中に移った翌年の、万暦12年にまとめられた。巻上が「詩部」41篇41首、巻下が「文部」12篇。詩のうち12首が、文のうち2篇が「五岳遊草」に再録されている。

#### 3-5-2-3. 入蜀稿

万暦16年に北京から四川までの大旅遊を行っている。その後、その折りの見聞に基づいて記されたものを、翌17年にまとめたもの。巻上が詩で、7篇32首、巻中と下が文で、中が4篇、下が3篇。詩は「早発桑乾別児」から始まり、「覽古二十五首」という山西・河南・陝西・四川の名勝古蹟にちなむ連作や、「登太華絶頂四首」などがあり、最も遊覧詩的である。文の内、巻中の3篇は「入蜀記」の上中下、である。詩は1首を除く31首が、文も1篇を除く6篇が「五岳遊草」に再録されている。

#### 3-5-2-4. 尺牘

知人に出した書簡である。巻上18篇、巻中15篇、巻下14篇の計47篇。対象は、屠隆あてのものが7篇と多い。

#### 3-5-2-6. 燕市稿

掖垣稿と同じ時のもので、在都時代の詩文を取める。巻上が「詩部」25篇25首、巻下が「文部」5篇。文は、都市在住時代のものであるので、「送茂洪觀察衛永序」「寿楽亭記」のような、非「遊記」である。

#### 3-5-2-6. まとめとその他の詩文

以上まとめると、文が33篇(うち2篇欠)と尺牘47篇、詩が73編98首である。このうち文8編と詩43編が「五岳遊草」に再録されている。

最後の詩文集である「入蜀稿」が、万暦17年であるので、その後没するまでの間に、地理書以外にも、詩文をものしていたと思われる。また「吏隱堂集」未収の詩文もあるだろう。それらについては、「地理書三種」と「王士性集」で拾遺が行われている。

「王士性集」では、「賑粥十事」など19篇を集める。先行する「地理書三種」に収める「遊天台山志」は、「五岳遊草」巻四の「入天台山志」に類似していることからか、「王士性集」では収録していない。

#### 4. おわりに

以上、王士性の伝記と著述について、そのあらましを概説した。彼の地理・地学思想については、著述の説明の中で紹介したに留まるが、客観的な観察から、論理的な考察を加えるという、高い「科学性」が見られる一方、三大龍脈説や、気の集散とその場所の「力」との相関関係など、堪輿家言（風水説）との関連は明らかである。そもそも、「風水説」の、中国なりの「科学性」をも考慮に入れつつ、今後、思想内容の検討をしていく必要がある。

#### 注

- (1) 『中国の科学と文明』1954年～。日本語版は、思索社1974～。
- (2) 日本では、森田明編『中国水利史の研究』国書刊行会1995、他。
- (3) 日本では、日比野丈夫『中国歴史地理研究』同朋舎1977、他。
- (4) 李時珍『本草綱目』、徐光啓『崇禎曆書』『農政全書』、宋応星『天工開物』など。
- (5) ②中華書局本に先立つものとして、同じ元明史料筆記叢刊のひとつとして『広志釋』（1981年）がある。これは呂景琳が台州叢書本を元にして点校を加えたもの。②所収の「広志釋」は、周振鶴が、新たに発見された康熙刊本を参照して、新たに点校を加えたもので、呂景琳本の改定版といえる。
- (6) 「地理書三種」所収。
- (7) 徐建春他『王士性論稿』、丁儀「王士性資料的新發現—關於『章安王氏宗譜』」（丁式賢『王士性研究論集』[黄河出版社、2014年] [「論集」と略] 所収)、鄭瑛中「王士性所属“章安王氏”世系略探」（『王士性研究文集』[白山出版社、2017年] [「文集」と略] 所収）など。
- (8) 「王士性集」所収の資料では、「第十三世閻、第十四世宗果、第十五世士性、第十六世立穀、第十七世宜成」とするが、従来の伝記研究とは三代分ずれがある。従来の説に従う。
- (9) 周振鶴「王士性行蹤繫年長編」（『地理書三種』所収、「中華書局本」に再録）、朱汝略「王士性年譜」（『王士性集』所収、「論集」に再録）。朱汝略は「章安王氏宗譜」を用いており、周振鶴よりも詳細である。
- (10) 『日本中国学会報』（第66集、2014年）。
- (11) この問題は王士性「広志釋」でも取り上げられている。
- (12) 丁苗「徐霞客与王士性及王立穀研究」（『論集』所収）。
- (13) 朱紉は強圧的な弾圧を行うが、「倭寇」と結託して密貿易を行っていた地元有力郷紳はこれに反発し、讒言により、朱紉を失脚させてしまう。そして2年後の嘉靖28年に、追い詰められた朱紉は服毒自殺をする。この件については、王士性自身が「広志釋」（巻之四浙江）で論じており、「此浙立巡撫、殺巡撫之始也」という。つまり巡撫朱公が讒言で死ぬと、以後巡撫となった者はみな讒言で死ぬことになった、という。「広志釋」ではこの他にも倭寇に関する小論が三篇ある。浙江を地元とする王士性にとって、倭寇の問題は極めてリアルなものであった。この点で、徐弘祖が倭寇のことに全く触れていないのは、時代性や地域性に加え、興味の所在が両者で異なっていたことにある。
- (14) 朱汝略の説。周振鶴は、喪明けは万暦15年とする。
- (15) 前掲注（7）。

- (16) 周振鶴「王士性著述小考」（「地理書三種」所収、「中華書局本」等に再録）。
- (17) 屠隆（1542～1605）。字は長卿、浙江寧波の人。万曆5年（1577）の進士。同12年（1584）詩酒に耽ったとして罷免され、以後売文生活を送った。「白榆集」などがある。「明史」巻288立伝。序文中で、王士性を「余友」としており、他に王垣叔近稿の「尺牘」に「与屠長卿」が数篇あることなどから、王士性と親交があったことが分かる。
- (18) 前掲注（16）。
- (19) 潘耒（1646～1708）。字は次耕、江蘇吳江の人。顧炎武の門人で、博学。康熙18年（1679）、博学宏詞として及第。「明史」編纂にも関わる。「遂初堂集」などがある。「清史稿」巻489立伝。
- (20) 馮甦（1628～1692）。字は再来、浙江臨海の人。順治15年（1658）進士。広東巡部等を歴任し、康熙20年（1681）致仕し故郷へ還った。「台州府志」の編纂に関わる。「知還堂稿」などがある。
- (21) 「四庫提要」。
- (22) 王士性への注目は徐霞客よりもかなり遅く、概説的な中国地理学史の著述で取り上げられたのは、王成組『中国地理学史：先秦至明代』（商務印書館、1982初版）の増訂第2版（1988年刊）が初めてある。「明代王士性《五岳遊草》中的地理見解」と題された一文は、「五岳遊草」全体を通して記されたものではなく、「天下郡国利病書」に引用された「広遊志」の3篇をのみ取り上げて論じている。
- (23) 本書の明清刊本は未見。活字本として、世界知識出版社本（2011年）や華齡出版社本（2012年）等がある。
- (24) 王士性と風水説との関わりについて、前掲注（22）の王成組は「風水迷信の堪輿家の影響を受けているが、これは古代山脈概念の一種の通病であり、王士性個人にその責は着せられるものではない」と、王士性をかばうような評を下している。科学性が重んじられていた時代における中国の、一昔前の見解によるものである。しかし、改革開放以後の、風水説を含む宗教的なものがプラスに評価されるようになった近年では、王士性と風水説の関係を否定的なものとは捉えていない。たとえば、朱汝略は「王士性集」前言において、「徐霞客は『探山水個究竟』の探険家、王士性は『理天下個頭緒』の地理学家であった」と、王士性の科学性を認める一方で、「伝統意義上の地理学家、即『堪輿家』だった」としている。
- (25) 「四庫提要」は、本書の記事に続いて、やはり王士性の著述として「黔志一卷」と「豫志一卷」をあげるが、「四庫提要」自身が述べるように、この二書は、曹溶が「広志釋」より「貴州」と「河南」を抽出（「四庫提要」は「遊記より抽出」と誤る）して、「学海類篇」に入れたもの。しばしば単行本として扱われるが、「広志釋」の一部である。他に「学海類編」は、別人の名前に仮託して「晋録」「秦録」「楚書」なる文章を収録するが、これも「広志釋」の「山西」「陝西」「湖広」である。
- (26) 馮夢禎（1546～1605）。字は開之、浙江秀水（今の嘉興）の人。万曆5年（1577）の進士。屠隆と親交があった。「歴代貢挙志」などがあつた。
- (27) 不詳。
- (28) 曹溶（1613～85）。字は洁躬、浙江嘉興の人。崇禎10年（1637）の進士。明朝で御史に至った。清朝にも仕え、多くの蔵書を持った。
- (29) 不詳。
- (30) 「四夷輯」は、おそらく異民族などを記したものであろう。清朝が、中華漢人にとって異民族（夷狄）であることから、清代になって、この部分が省かれたのかもしれない。なお、明代の省のうち、福建省は、現行本「広志釋」に見えない。あるいは、「四夷輯」に含まれていたのかもしれない。
- (31) 「王士性集」前言等。
- (32) 例えば、嘉靖33年（1557）、倭寇が浙江・江蘇に侵入し、内陸部まで蹂躪したことがあつた。その際、明軍がかろうじて勝利を得た戦いに「嘉興府王江涇の勝利」がある。「広志釋」では「浙江」第三十八節「嘉靖倭寇」の中で「王江涇之捷」を取り上げている。そして、徐弘祖も崇禎9年（1636）9月26日に王江涇を通過しているが、ただ通過地として名前をあげるだけで、倭寇のことは一切触れていない。徐弘祖にとって、経世済民に関わる事象は、物産など地理的な問題を除けば関心外だったのである。

- (33)この点、徐弘祖は、明らかに、洞穴を「氣」が流れるものと捉えている。
- (34)この点も王士性は徐弘祖と異なる。徐弘祖は、河川を物資の流通路として見ることはなく、あくまで「氣」が流れるところとしている。
- (35)前掲注(16)。
- (36)王世貞(1526～1590)。字は元美、南直隸太倉の人。嘉靖26年(1547)の進士。官は刑部尚書に至った。書家としても高名で、古文辞学を唱えた。「明史」巻287立伝。この序文は、彼の詩文集である「弇州山人続稿」巻五十一所収。
- (37)前掲「王士性集」前言。
- (38)汪道昆(1525～1593)。字は伯玉、安徽黄山県の人。嘉靖26年(1547)の進士。文官としても活躍したが、戚繼光らとともに、倭寇対策に功があった。戯曲作家としても高名となる。「明史」巻287立伝。「太函集」などがあり、この序文もそれに所収。
- (39)現行本では「掖垣稿」、「朗陵稿」、「入蜀稿」、「尺牘」、「燕市稿」の順に並んでいるが、成書の順番は、「朗陵稿」、「掖垣稿」と「燕市稿」、「入蜀稿」の順で、おそらく「尺牘」は「吏隱堂集」を刊行する際に、まとめられたものではないか。本稿では現行本の順番に検討する。
- (40)万曆18年は、王世貞の没年。
- (41)例えば、「第爲學術不明群議未一懇乞宸斷亟採公論以定大典疏」は、「広志釋」巻之四第三節の、江西で陽明学が盛んだとする指摘と、「題爲祖陵當護運道可虞淮民百萬危在旦夕復黄河故道以圖永利疏」は、同巻之三の黄河治水論とつながるものがある。

以上

(2017年10月30日提出)

(2017年11月18日受理)